

2013 離島覚書（宮城県・桂島）



ウキペディアより引用

令和4年8月24日（水）

桂島漁港

9時30分発の塩竈市営汽船に乗り、9時53分に最初の寄港地である桂島の桂島漁港（第2種漁港）に着いた。桂浜では、高齢者のハイキング客や高校生の団体客などかなり数の乗客が下船した。

桂島には「新奥の細道」と呼ぶハイキングコースが設定されており、それを目当てにトレッキングに訪れる観光客も多いのだろう。

漁港の栈橋にはしゃれたデザインの待合所が建っている。震災の数年前に建てられたものだ。ただし待合所には椅子とトイレがあるだけで、売店などはない。

桂島には日本総研の地域振興に関する調査（大沢、富田、関さんと同行）、震災3年後の被災状況調査、「あたまっこガキ」の取材に続いて4度目の訪問になる。

桂島漁港の西側は埋め立てられ、広い漁港用地が確保されている。これは後述するようにノリ養殖が盛んであったため、漁港用地はノリ網などの作業や資材置き場として使われている。また、ノリの加工場が2棟建つ。市営汽船の船着き場の背後は漁船の係留場所となっているが、漁船の多くは船外機であった。

桂島は面積0.76 km²、周囲6.8 kmの東西に細長い島で、浦戸4島の中では寒風沢島に次いで大きい。島の西と東に集落があり、西側を桂島地区、東側を石浜地区と呼ぶ。

震災前の桂島の世帯数は107戸、人口は266人であったが、2020年には世帯数が68戸（桂島52戸、石浜16戸）、人口は124人（桂島96人、石浜28人）に減少しており、特に人口は半分以下になっている。また2022年7月末の住民基本台帳上の世帯数は82戸（桂島63戸、石浜19戸）、人口は142人（桂島107人、石浜35人）と増えているが、住民票を

置いているだけで実際に住んでいない人もいるため、ここにきて実際に増えているのかどうかはわからない。なお、浦戸4島の中では、世帯数、人口ともに一番多い。



船客待合所と港内に係留されている船外機（左）、ノリ養殖の資材置き場と作業場を兼ねた広い埋立地（右）

宮城県漁協浦戸支所

下船してすぐに漁港用地内に置かれている宮城県漁協浦戸支所を訪ねた。

支所は、島の南側に位置する桂浜海水浴場側から押し寄せた津波が島を縦断して反対側（北側）の桂島漁港側に抜けたため、この津波で事務所が大破し、長いことプレハブの建物を仮事務所にしてきた。その後、日本財団が「番屋再生事業」（水産業や地域コミュニティ復興の拠点として番屋建設を支援）で建設した建物を支所として使っている。

鈴木洵支所長に面談し、1時間ほど話を聞いた。

支所の現在の組合員数は正が22人、准が68人の合計90人である。

浦戸支所の組合員は桂島の桂島地区と石浜地区、さらに野々島の漁業者で構成されている。地区別の正組合員の内訳は桂島が16人（准：35人）、石浜が2人（准：16人）、野々島が4人（准：19人）で、桂島地区が圧倒的に多い。

震災前の正組合員は59人（うち野々島が17人）、准組合員が84人だったので、正組合員はおよそ1/3になってしまった。この傾向は同じ浦戸諸島の浦戸東部支所でも同様のことから事務所の再編は不可避となっており、2023（令和5）年度には両支所と塩釜市第一支所の3支所を統合して、マリングート内に塩釜地区総合支所を置き、桂島は出張所に、寒風沢島の浦戸東部支所は常駐職員をゼロとする計画だという。

職員は震災前には5人いたが、震災後は体制を縮小し、現在は支所長を含めて3人になっている。

桂島は養殖業が主体で、ノリ養殖とカキ養殖が営まれている。漁業はアワビとアサリを対象とする採貝漁業とシラウオ漁業、そして一時期、ギバサ（アカモク）の採取も行われていた。なお刺網、籠、筒などの漁業も営まれているが、何れも漁協への出荷実績はなく、専ら自家消費が目的だ。

震災前、アワビの採貝は桂島で5経営体が営んでいた。しかし2020（令和2）年はコロナ禍にあって単価が安かったことから操業を中止。昨年（2021年）は石浜地区の2経営体が営んだだけだった。漁獲方法は素潜りで、漁期は6月～7月の2ヶ月間（7月が中心）である。2021（令和3）年のアワビの生産量は、2人で164.5kg、生産額153万円であった。

採捕したアワビは畜養施設で保管し、ある程度量がまとまった段階で、十三浜の業者が取りに来る。

アサリの採貝漁業は8人が営む。何れも桂島集落の組合員である。漁期は6月末から盆前までの2ヶ月弱で、ジョレンで採取する。令和2、3年の生産量は4トン強、生産額は約300万円強であった。採取したアサリは昨年からイオン東北に販売している。イオン東北はレトルトに加工して販売しているらしい。アサリの採貝は震災前の多い時期には40人ほどが営み、約9トン、500万円以上を水揚げしていた。しかし、地震で地盤が沈下し、アサリの分布域が変化したことから、震災後明らかにアサリ資源は減っているという。

ギバサはコロナの影響で売れなくなったため、昨年からは採取していない（業者は在庫を抱えているのでいらないと言ってきたそうだ）。採取する場合の漁期は4月である。

震災直後には刺網によってシラウオが獲られていた。野々島で1人、桂島で3人、石浜で2人の合計6人が営んでいた。しかし、近年は漁協への出荷はない状態が続いている。同様にアワビ漁が終了した後の8月に漁期を迎えたウニも自家用で獲られている程度で、漁協への出荷はなく、資源量が減少しているとのことだ。



桂島の船客ターミナル（左）、番屋再生事業で寄付された漁協の事務所（右）

ノリ養殖の協業化

震災前、桂島では13経営体がノリ養殖を営んでいたが、震災を境にこのうちの3経営体が廃業した。3経営体のうち2経営体は寒風沢島と同じようにワカメ養殖に転換し、副業として震災復興工事に伴う警戒船の仕事に従事した。もう1経営体は高齢であったことから、震災を契機に引退した。

残った10経営体は震災で被災を免れた4台の乾燥機を活用して、共同操業に取り組んだ。その後、乾燥機が残った2経営体が離脱し、8経営体は水産庁の「がんばる養殖事業」を活用して加工場を整備し、共同で乾海苔生産を行うことになった。この加工場は漁協事務所の脇に2棟整備され、4経営体ずつに分かれて操業していた。

その後、2015（平成27）年にこの協業体は浦戸合同会社を設立し、ノリ養殖の法人経営に移行した。ただ会社を設立する時点で2経営体が離脱、その後さらに2経営体が離脱したので、現在は旧4経営体が合同会社としてノリを生産している。当初からの参加経営体数は4に減ったが、2棟の加工場はそのまま使用している。なお4経営体が相ついで離脱していたのは、やはり高齢化したことが主たる理由だった。

乾燥機が残った2経営体はその後もノリ養殖を継続している。桂浜地区にあるのが(有)千葉水産という法人経営体、石浜地区は個人経営である。つまり震災後、ノリ養殖の経営体は法人2社と個人経営体に再編されたことになる。なお、(有)千葉水産は2人の息子がおり、後継者が確保されてそうだ。しかし石浜の個人経営体の後継者は支所長と同年だが、親の後継を継ぐ予定はないことから、将来は廃業の運命にあるという。一方、合同会社には後述するように地域おこし協力隊のOBである若いIターンが加わり、若手が中心に頑張っている。

このように桂島のノリ養殖経営体は法人経営体2と個人経営体1の3経営体に再編されているが、震災前後のノリ養殖生産の動向についてみておこう。

桂島における震災前(2010年度)のノリの生産枚数は3,181万枚であったが、協業化によって2016年度には2,997万枚まで回復した。しかし上述したように経営体が減少したことと環境変化による収量の低下が重なり2021年度には1,224万枚に減少、震災後のピーク時に較べると半分以下になってしまった。一方、生産額も2010年度は2.52億円であったが、直近の2021年度は1.22億円と半減している。なお、3経営体のうち合同会社が全体の生産量の約7割を占めている。

松島湾はノリ養殖の産地の中では最も北に位置するので、西日本とは逆に暖冬はノリ養殖にとって好ましいが、近年は寒い冬が続いているため、ここ2年間はノリ養殖にとっては悪い状態が続いているようだ。

桂島におけるノリの採苗は陸上の人工採苗と天然採苗の両方で行われているが、人工採苗が約90%、天然採苗が約10%であり、前者が圧倒的に多い。人工採苗施設は桂島漁港の東端に置かれている。松島湾側に面していたことから津波の影響をほとんど受けることなく温存された。現在、浦戸合同会社と(有)千葉水産がこの施設を使って種苗を生産、ノリ網に種付けをしている。

漁港の東端にあるノリの採苗と種付けの施設を見に行った。ノリの採苗施設では、カキ殻が水槽に吊るされ、ノリのコンコセリス(糸状体)を培養中だった。その隣に種苗を海苔網に着ける大きな装置が置かれており、こちらもすでに採苗の準備が整っていた。なお、桂島のノリ養殖は2期作であり、2期目は冷凍保存した網を用いている。

桂島と同様にノリ養殖が盛んであった寒風沢島は、震災で加工場が壊滅的打撃を受けた。しかし桂島のように共同経営には至らず、全員廃業し、ワカメ養殖に転換した。一方、桂島の場合は「がんばる養殖」事業を活用して、何とか生き残ったのである。



ノリの培養(左)、種付け用の機械(右)

ノリ養殖の協業化は頭でわかっているにもかかわらず、なかなかうまくいかなかった事例が多い。桂島のケースは震災という大きなインパクトが大同団結を促したのだろう。ただ多少の齟齬が残るようで、私の方からは組合員はノリの原藻生産に特化し、乾海苔生産は漁協加工というように生産を分離している三重県の事例を紹介して、齟齬を解消する方策を提案しておいた。

あたまっこカキの挫折

カキは主として筏式、延縄式、簡易垂下式の3つの方法で養殖されているが、水深が浅い桂島では主として簡易垂下式で養殖されてきた。

前2者は筏や延縄の下に垂下連が吊るされているため、常に海水中に浸かった状態にある。一方簡易垂下式は竹などの杭を海底に打ち込み、その上に棚を作って垂下連を吊るすので、潮汐によって水位変動を受けることになる。このため垂下連の上部は干潮時に空气中に露出する。

ところで天然のマガキは潮間帯に分布することからむしろ干潮時に空气中に露出することは自然の摂理にかなっている。ただ、簡易垂下式の垂下連上部のカキは四六時中餌を摂れないため成長は悪く、したがって常に餌を摂ることのできる筏式や延縄式に較べると単位面積当たりの生産性も著しく低い。

それでも桂島の養殖カキの生産額は2005年度まで1億円を上回り、ノリと並ぶ重要な収入源だった。しかし就業者の高齢化と共に生産量は減少、震災前(2010年度)の生産量(むき身)は44.6トン、生産額は6,300万円ほどに低下していた。

震災前、カキ養殖は8経営体数が営んでいたが、震災後に塩釜出身の小泉善雅さんという若手が加わった。彼はカキの一口オーナー制度の発案者で「海の子ネット」というオンラインショップを手掛け、「殻付き」で販売していた。ちなみに従来からカキ養殖を営んでいた8経営体は「むき身」で出荷。

しかし鳴き物入りでIターンした小泉青年は桂島を去り、その後養殖業者の高齢化も進んで現在は3経営体に減少している。

一方、農水省農林水産技術会議は震災復興の大型プロジェクト(食料生産地域再生のための先端技術展開事業)の一環として桂島において「あたまっこカキ」の生産技術開発に取り組んだ。簡易垂下式養殖のうち潮間帯とおなじような環境で育つ垂下連上部のカキを「あたまっこ」と名付けたわけだ。



カキの採苗器(左)、簡易垂下式の支柱(右)

このプロジェクトは上述したように簡易垂下方式の「生産性が低い」ことを逆にとり潮間帯と同じような環境で育てることによって、食味のいいカキを生産し、付加価値を高めようとしたのである。具体的には海底に杭を打ち、干満差のある水深帯に棚を作り、この上にカキを並べて育てる方法であった。

生産した「あたまっこカキ」は閑ゼネラルオイスターというオイスターバーに出荷して一定の成果を上げたが、残念なことに食中毒が発生した。このためカキの浄化時間（紫外線滅菌海水による蓄養）を2倍にしたところ、食味が一般のカキと変わらなくなり、販売先を失うことになった。加えてこのプロジェクトのリーダーだった後藤さんが亡くなられたため、新たなチャレンジは挫折したのである。

こうした経緯もあって、震災後カキの養殖生産は衰退の一途を辿っている。近年、カキの斃死が多くなっていることに加え、高齢化が進み零細経営を余儀なくされていることから行使台数を増やせない（空き漁場を有効活用できない）ことも影響し、2021年度のカキの生産量は約4トン、生産額は約500万円であり、桂島のかき養殖はもはや風前の灯となっている。

西海岸のトレッキング

漁協での取材を終えてから、桂島漁港の東の行き止まりまで行き、上述したノリの採苗施設とカキむき場を確認する。

漁港から津波が越波してきた坂を登り、桂島の集落に入る。集落内の松崎神社を参拝した。神社の裏手に廻るとタブの森になり、うす暗い山道を進む。ここから島の西海岸沿い続く山道は「新奥の細道」と呼ばれる。山の尾根に相当し、海側は断崖絶壁だ。

白崎展望台から桂島漁港西側の埋立地のノリ加工工場が眺望できる。ベンチに腰掛けて、昼には少々早いが、塩釜で購入してきた助六寿司を食べる。続いて二度森展望台に出た。ここで取材ノートを白崎展望台に忘れてきたことに気づき、慌てて取りに戻った。

西の山展望台からは松島湾の小さな島々が眺望でき、その先に塩釜の市街地が見える。このあたりに来ると、大きなアカマツが目立つようになる。マツには一本一本に標識が打たれ、マツクイ虫防除の薬剤散布の記録が書かれていた。西海岸はほぼ垂直の断崖絶壁で、目の前に大藻根島が横たわる。西海岸の南端に観月崎展望台があり、ここから階段を降りると、長い砂浜が続き、桂島海水浴場となった。



西海岸の眺望（左）、アカマツの林（右）

桂島海水浴場

桂島海水浴場は島の南側に位置し、長さ 500mほどの幅広の砂浜が続く。ここは外海から津波が進入した場所にあたる。海岸沿いに並んでいた松林をなぎ倒し、島の南側の低い土地にある家を破壊、坂を駆け上がって島の反対側の桂島漁港に達した。全壊した家屋は 30 戸余に及んだのである。

震災後、砂浜の背後には 300mほどの長さにわたって高さ 2 mほどの防潮堤が築かれた。その先にはテラスが造られ、海水浴客が砂浜にアプローチしやすいように階段護岸になっている。テラスの近くには海水浴客向けにトイレとシャワールームなどが整備されていた。

テラスの周辺は漂着物が取り除かれているが、砂浜の西方半分にはたくさんの流木が漂着し、そのまま放置されている。

震災後 3 年目に訪れた時には防潮堤の工事中が始まっていたが、この時に宿泊した「ペンション鬼ヶ浜」のご主人は高い防潮堤が造られ、海が見えなくなると心配されていた。ただ、最終的にできあがった防潮堤はかなり低く抑えられている印象だった。

松林の跡にはクロマツの苗木が植えられていた。ただし、まだ小さく、草に埋もれてしまっている。

背後の集落跡はおそらく災害危険区域に指定されていると思われ、更地になっている。

海水浴場では 10 数人の大学生とおぼしき一団が水泳をしていた。かなり泳ぎの達者な連中ばかりで、水泳のレベルも揃っている。沖にブイを設置して、浜とブイの間を往復していた。

この浜から坂を登ったところに「ペンションスターボード」がある。さらにその先に「ペンション鬼ヶ浜」があり、両方とも立地条件からみて島にやって来る海水浴客をターゲットにしているに違いない。「鬼ヶ浜」には前回来た時に泊まっているので、今回は「スターボード」に宿泊を打診したが、「一人客はお断り」とのことで、桂島での宿泊は断念せざるを得なかった（この 2 軒以外に周年営業している宿泊施設はない）。



桂島海水浴場（左）、海水浴場で水泳をする大学生（右）

桂島ステイ・ステーションと地域おこし協力隊

海岸から坂を登り詰めたところは旧塩竈市立浦戸第二小学校のあったところだ。この小学校は 2005（平成 17）年度で廃校になっている。廃校と同時に野々島にあった市立浦戸中学校との小中併設校となり、さらに同校は 2015 年に市立浦戸小中学校になり、小規模特認

校として学区外（島外）から児童・生徒を受け入れている。

この旧小学校跡は震災時に桂島の避難所となり、大型連休までの約2ヶ月間は約200人が避難生活を送った。その後、同校のグラウンドに応急仮設住宅が整備され、被災した島民が一時的に生活していたのである。後述する災害市営住宅の整備に伴い仮設住宅は撤去され、現在は広場になっている。そして旧小学校の建物は「桂島ステイ・ステーション」と呼ばれ、島に滞在する人たちのための宿舎に生まれ変わった。

来る時の船で一緒だった高齢者の集団がちょうど「ステイ・ステーション」の施設見学を終え、外に出てきたところだった。このステーションには管理人として女性1人が配置されている。見学者が去ってから、彼女に少し話を聞いた。

建物には合計6つの部屋があり、1部屋に3人まで泊まれるので、最大18人の収容が可能だ。現在、ノリ養殖の浦戸合同会社で働く地域おこし協力隊の1人が自炊生活をしているという。当初2人の協力隊員が自炊生活をしていたが、うち東京都出身の男性は1年もおらずにやめたそう。現在残っている人は仙台市出身の30歳前後の青年で、3年目に入るといふ。彼は現在ノリの種付けの準備をしているとのことだ。彼が乗っている「浦戸合同会社」と書かれた軽自動車ステーションの玄関前に置かれていた。

なお同じく地域おこし協力隊員として島にやって来て、卒業後、現在は合同会社で働く人が2人（妻帯者で、埼玉県と千葉県の出身者）おり、通常この2人は塩釜市内から船で通っている。ただ冬の収穫作業の忙しい時期はこのステーションに寝泊まりしている。

彼女によると、地域おこし協力隊員でやって来る人は大卒がほとんどで、これまでに協力隊でこの施設に入った人は6～7人いる。ただし、仕事の内容が当初の予想と違っていると感じ、諦めて帰った人も多らしい。



ステイ・ステーションとして活用されている旧小学校の校舎（左）、旧校舎のグラウンド（右）

浦戸桂島災害公営住宅

旧小学校のグラウンドに建設された仮設住宅には当初22世帯が住んでいた。しかし8世帯が死亡、病気、転居などによって島を去り、残ったのは14世帯であった。

その後、旧小学校のグラウンドの下に塩竈市の災害公営住宅が整備された。住宅の建設は2期にわたって進められた。

第1期工事では、1号棟（平屋長屋4戸、2DK）と2号棟（2階建て長屋4戸、3DK）、合わせて2棟8戸分が2015年2月に完成している。2期工事では、3号棟（木造平屋長屋

3戸、2DK)、4号棟(木造平屋建て1戸、3DK)、5号棟(木造平屋建て1戸、4DK)、合わせて3棟5戸分が同年12月に完成している。つまり13戸が現在公営住宅に入居していることになる。

なお、同じ敷地内の最上部には個人住宅が1棟建つ。家の前には、「松崎丸」と書かれた車が停まっていた。

個人住宅を合わせると敷地内に14戸分の住宅があることから、仮設住宅で生活していた全世帯が、震災から4～5年後には災害公営住宅と個人の住宅に住むことができたわけだ。

なお、2020年国勢調査時の桂島地区の世帯数は52戸だったので、1/4の世帯が公営住宅に入居していることになる。



第1期工事で建てられた災害公営住宅(左)、第2期工事で建てられた災害公営住宅(右)

白石廣造邸跡

島の尾根筋の道を南東方向に向かって歩く。6年前に桂島を訪問した時には、「松島白菜」の採種地がこの高台にあったが、すでに採種を受託する農家がいなくなったようで、「菜の花畑跡」と書かれた看板が立っていた。

その跡地にはキバナコスモスやヒマワリの花が咲く。道路脇には沢胡桃の木が多く、胡桃の実がいくつも路上に落ちていた。寒風沢島でも沢胡桃の木がよく見られたので浦戸諸島にはもともと多かったようだ。

石浜の集落に下る分岐を過ぎて尾根筋の道を東に向かって進む。石浜神社を経てやはり石浜に下る階段が現れた。階段を下りずそのままさらに山道を進むと、道路の両側に上水道の配水場が置かれていた。本土側から海底管を通じて供給されてきた水道水をいったんこの高台に揚げて、集落へ自然落下されているのだろう。ここを過ぎると林の中に入り、やがて津森山の頂上に出た。

頂上には雨乞いの時に使われた雨降石が置かれていた。この石は相州雨降山石尊権現を祀るとの伝承があるらしい。相州雨降山とは神奈川県丹沢にある大山のことだ。別名「雨降山」と呼ばれ、雨乞いの信仰の山として知られている。島の農業は天水に依存していたので、雨は食料生産を大きく左右する存在だった。

ここからヘアピン状の坂を下ると竹藪の中に廃屋が現れた。さらに下ると海に出て、この周辺は白石廣造邸があった場所になる。

白石廣造は1844(弘化元)年に埼玉県北葛飾郡に生まれ、江戸に出て奉公、石浜の基礎

を築いた木村万平にしたがって桂島の石浜に来た。ところが寺田仙蔵の運漕社に敗れて衰退した木村万平は店員だった白石に店舗を譲って帰郷してしまう。こうした経緯を経て、白石は 1872（明治 5）年にこの地に白石商会を設立した。白石はライバルの運漕社との競争に勝ち、その業を引き継いで事業を拡大する。その後、海運業はもとより、水産業の振興、陸奥出羽間の道路を切り開き、遠洋漁業を経営し、オホーツク海におけるラッコ漁にも事業を拡大した事業家だった。白石の登場によって、浦戸諸島の玄関口は寒風沢島から桂島の石浜に移ることになったのである。

そして、1889（明治 22）年の町村制施行に伴い、初代の浦戸村村長に就任する。そして 1913（大正 2）年に 70 歳で没した。白石はいわば桂島が誇る著名人であった。2 代目白石廣造は、所在地を塩釜に移して倉庫業及び運送業を業務とする株式会社白石商会に発展、さらに 1925（大正 14）年には白石汽船を興して、塩釜から北海道間の貨物輸送を展開するが、1928（昭和 3）年に解散している。

石造りの白石廣造邸の跡が残り、その前にガイド板が設置されていた。敷地内は草が刈られて、礎石が現れている。以前来た時は草むらだったが、震災から落ち着きを取り戻したこともあり島が誇る史跡を大切に守ろうとしているのだろう。



白石廣造邸の跡（左）、敷地内に残る礎石（右）

石浜

石浜は寒風沢港と異なり、江戸時代は対外的な港として利用されていなかったが、明治時代に入ると利に聡い商人たちが進出して大いに賑わうようになった。塩釜市史によれば、1871（明治 4）年に木村万平が進出して貨物荷揚場を築いて倉庫や店舗を設け、さらに寺田専蔵が運漕社を設立、小野組なども進出した。さらには上述したように白石廣造が邸宅を構えて、一大貿易港に発展した。明治 10 年代になると、石浜港は寒風沢港にとって代わって石巻港に次ぐ港として栄えたのであった。しかし、1887（明治 20）年に仙台と塩釜を結ぶ鉄道が開通すると海運業は衰退し、石浜は静かな漁村に戻っていった

白石廣造邸跡から山の中腹の道路を海に平行に西に進むと石浜の集落になる。石浜は石浜水道を境に隣の野々島と隣り合っている。平地はほとんどなく、背後の山の斜面にへばりつくように家々が並ぶ。

2020 年国勢調査時の世帯数は 16 戸、人口は 28 人であった。地元の人に聞くと、現時点で石浜に実際に住んでいる世帯数は 15 戸、人口は 34 人とのことであった。震災で壊れた

家は撤去されて空き地になっているが、空き家は5軒あるという。震災前の2011年2月末時点の住民基本台帳上の世帯数は26戸、人口は58人だったので、世帯数は11戸、人口は24人減となっている。

震災による津波の被害は、①石浜水道から侵入した津波は水道部を通過しただけだったこと、②平地が少なく家は斜面に階段状に建っていたこと、が幸いして3戸の家屋が流失しただけだった。また、津波は護岸を破壊して石浜港内に侵入し、栈橋や漁具倉庫を壊したが、全ての漁船は流失を免れている。浦戸諸島の集落の中では最も津波の影響は少なかったといえよう。

上述したように、石浜地区の正組合員は2人と少ない。准組合員は16人なので、石浜地区の全世帯が組合員になっていることになる。

ノリ養殖は清福丸という経営体が営む。こちらは「日の出荘」という季節型（夏季が中心でノリ養殖の端境期）の民宿を兼業している。ちなみに石浜地区には以前、日の出荘を含めて4軒の民宿があった。以前はカキ養殖を営む経営体もあったが、今は行われていない。アワビの採貝漁業は上述したように2経営体が営んでいる。

石浜の集落には、その集落規模から見ると不釣り合いなほど大きい郵便局が置かれている。恐らく明治初期に郵便局が設置された当時、この石浜地区が経済の中心であったことを反映しているのであろう。浦戸諸島で唯一の郵便局で、ここから船で各島への郵便物の集配送を行っている。

浜でスチロール箱の荷づくりをしている人がいた。高橋さんといい、この郵便局に勤めていた。准組合員で定年退職後、刺網を営んでいる。この日はガザミを獲ったようで、箱立し運送業者を経由して市場に出荷するのだという。「震災後、漁港を整備してもらったのだから、漁業をしないのは問題だ」というのが彼の認識で、定年後に漁業に励んでいるという。おそらく漁協を通さずに直接出荷しているものと思われ、漁協の水揚データには反映されていない。

石浜港内には、漁船1隻、船外機14隻が係留されていた。この数もほぼ組合員数と一致する。ちょうど老夫婦が漁船に乗って出ていった。



石浜の集落（左）、石浜漁港に係留されている漁船（右）

船勉

石浜を出発する塩竈市営汽船「しおじ」に乗船し、14時18分に石浜を離れた。

次の寄港地の野々島に着くと、大勢の小中学生が乗り込んできた。この日は夏休み明けの最初の登校日だったようだ。塩竈市立浦戸小中学校の児童・生徒である。往きの船は教職員も一緒だが、帰りの船も教職員が一緒という訳にはいかない。しかし万が一にも事故があったら困るので、帰りの船に先生1人が同乗することになっている。この日は保健担当の先生が引率していた。

船の座席に座ると、小学生は早速、カバンからドリルを取り出し、国語や算数の勉強を始めた。浦戸小学校名物の「船勉^{ふなべん}」というのだそうだ。

港には親が車で迎えに来ている姿が目立った。もちろんJR仙石線で通学する児童・生徒もいる。

マリゲート塩釜から歩いて塩竈市役所を訪れ、浦戸4離島の人口等のデータをいただく。続いて本塩釜駅近くの別館内にある教育委員会で浦戸小中学校に関する情報を収集する。階下が市立図書館になっており、郷土関連の資料を閲覧し、一部をコピーする。

駅前の「ふうらい坊」という店で、刺身、おでん、焼き鳥のセットメニューで一杯やり、アナゴ天丼を食べてホテルに戻った。



船勉に励む小学生（左）、浦戸小中学校の児童生徒を乗せた市営汽船・しおじ（右）